

研究通信 NO.6

村落社会研究会
東京都文京区
編集部
東京教育大学
社会学研究室内

仙台大会を前にして

喜多野一

村落社会研究会もいよいよ四旬の誕生日第一回の大会を持つことになるのだが、なんとしてもこの第一歩を有意義な成果で飾りたいものである。吉うまでもなくそれには全員諸兄の懇意ある協力が頼もしく要な條件である。日本社会学会大会に引続いてのこととて疲れてむしらむると思ふが、どうか村研の事業上の創立大会であるこの門出を意義あらしめるため、努めぬ協力をお願いしたい。

大会は情報の伝達を中心とする共同研究会が主な行革となるが、その他にも色々な協議事項がある。それに会員の切磋琢磨として懇親ということも甚だ大切である。そしてすべてにおいて懇意のない交換と底本公正是科學的精神性を基礎にしき上げるところにあるだろう。そのた

れもあるのだが——われわれの意図はよく達せられたとは言へなかつた。たしかに「通信」の技術も極めていた。しかしわれわれの愛好は群つて貰へるはづだから、それへの反響はもつと強くてもよかつたと思うのである。しかし此の「通信」を通じては、たゞこれも「通信」を通じては、たゞ研究を如何に進めているかを知りあつては、たゞ研究の目的から極めて大切であるし、会員相互の研究推進のためにも甚だ意義であると思ふのである。今迄も一部の人々の研究方針は解つてゐるし、また研究上の連繋も行はれていたが、それはまだ甚だ不充分で、殊に近頃は研究者の増加に伴つて様子は一層鮮らしくなり、連絡も難しくなつてゐるようと思う。そのための研究上の懸念や混乱もよくはまゝようになつてゐる。また村落社会の研究は視野も広いし、その性質も複雑であるから、どうしても研究成績に凹凸がある。また解つてしまふ、がら手をつければ面白い研究面も少なくない。もちろん新しく発展する問題もあ

て運行されることを期待したいのである。ところでわれわれ当初のせ話役としてまだ希望したいことは、すべてに亘つて諸兄の積極的な意見を述べたいなどといふことである。今迄も会の運営には未来るだけ近く会員の意見を反映させないと努力したつもりであるが、主として「研究通信」に熱つたため——またそうせざるをえない面もあるのだが——われわれの意図はよく

めに村研は如何に組織され運営されるべきかを、建設的具體的に話し合いたい。会の基本方針はその中から決定されて来るのではなければならないと思う。

る。そういう研究フィールドへ研究者がめしめいの用意とやり方で根深きに忍び込んでいるという現状から来るだけ貴明にお互に脱け出るべきだと思う。そこで会員相互の癡意と工夫によって脱却し整理し且つ積極的な癡意とまで持つて行くことを期待したいのである。村研はそのための駆持役であり、場があり、もし出来ればそれを推進するよう互河がの機能を持てればと思う。幸い村研には社会学以外の學研究からも参加してくれているのだから知識の交流と相互批判とよって村落社会の研究は一層盛らぬいた結果的向上させることも出来るだろう。しかし如上の効果をあげるために、いづれにせよ会員相互が人間的にも學問的にも懸念しあうことの大切であると思うのである。当台大会はまづそういう好機会としたのである。会員は大いに癡言しあうべきだと想つのである。そしてそれを駆持き「研究癡意」にも成長すべきだと想うのである。

ところが議題を中心とする共同研究会は、報告担当者の報告を中心失敗した形で行はれるはづである。だから報告者以外による多くの方の討議を加えて開催する。議題の決定については議題委員会の協議状況をその都度「研究通信」に癡表してきただのであるが、実はあの癡表はあまりとお素でなかった。委員の一人としてお詫び申さねばならない。終つて「選定」の第五号に掲げた委員会報告の中に示されてゐる最後の要約に連するまでの、四欄点の推移がよく伝達されなかつたため、不便を感じられたことと思ふ。一応「農地委員会」にまざしおつたので、第五号の要約にまで抜けたのは、やはり戻るべく多數の会員の討議参加を期待するが故なのである。

しかし問題の焦点は農地改革を通しての地主の性格と地位の変化の検討にあるので、それと関連する問題を会員の関心に従つてとり上げて論じて貰うこととしたのである。そこでの要約のように拡大して問題を提示したのである。

そこで甚だ勝手ながらこの癡意に御協力頼つて、共同討議が成功するよう、データを整へ論議を完めて大いに討議を癡展させたい。報告担当者はもちろん討議参加者もデータをプリントして会員前日までに提出して下さると、討議の成功に大いに意義づけられることを信じるのである。

いに設立つと思う。主として時間の都合で報告担当者を兼ねかに制限したが、なるだけ討議には参加してほしいので、予め通告してほしいうのである。むしろその場の論議の癡展は自由にあらわれたことだしたい。しかし締合議題のためそれが申されねばならぬといふことはない。むしろその場の論議の癡展は自由にしてほしいのである。もちろん討議参加に日本を通告しなければならぬといふことではない。むしろその場の論議の癡展は自由でなければならぬ。

しかし締合議題を急遽求めることは固違いだろう。それよりも問題の所在を明らかにし、それを根究する意をお互に認めあうことが出来れば成功だと想ひ。そして共同研究のための協力態勢の基盤が築かれればさらに成功だと思う。もとより村落社会研究の課題は今回の大会の課題に限らるべきでないことは云うまでもない。今回はたゞそれを共同研究したがる課題の一つと想えて探り上げたにすぎない。それにはそれだけの理由があるが、またそれはそれでしかねばならぬ会員の研究の尊重すべきことを知つてゐるつもりである。要は今回の大会がそういう会員相互の研究を知り合い、學術交流促進機関の機能として活用されねばならぬ。村落社会研究会の成立は大いに意義づけられることを信じるのである。